

## まえがき

私は社会に出て心が病んでしまった人を何人も見てきた。

学生時代に前向きに活動していた友人、内定者研修では明るく快活だった新人社員、苦楽をともしした若き社員たちが、あるときにいきなり心を病んでしまう姿を見るたびに何もできない自分をはがゆく感じていた。「彼らがつとイキイキと活躍できるような社会にできないものだろうか？」そう思った思いを長い間持ちつづけていた。そして心を病んでしまう原因に「自分らしく生きる」ことが難しい社会の現状があることがわかった。

仕事もプライベートも「自分らしく」生きている人はさほど多くないのかもしれない。人間生まれてすぐには他人に忖度したり遠慮したりはしないものだ。

「ママが寝ているから泣くのは我慢しよう」なんて忖度する0歳児は聞いたことがないように、人間はそもそも生まれながらにわがままな生き物だ。

成長するにつれて、社会性を身につけ、社会に認められたいという社会的欲求が生まれ、さらには他者よりも評価されたいという承認欲求が現れるようになる。

そのなかで、本来の自分らしさよりも他者から見た自分を重要視するようになる。それは社会的にわかりやすい偏差値や学歴、社会的知名度によって測られることが多い。自分が認める自分よりも社会から認められる自分に重点を置くようになっていくと「自分らしさ」というものは心の奥底に置かれてしまう。

そうこうしている間にライフイベントが始まってしまい、結婚・出産・子育てなど「自分のこと」よりも大切にしなければならぬ存在ができる。そうして本来の自分らしさを心の奥底に閉じ込めたまま、数十年の月日が流れていく。

そんなある日、数十年真面目に勤めてきた会社から「これからはあなたの好きなように生きてください」と突き放されてしまう。

言われた人にとっては青天の霹靂である。「好きなように生きるって言われても、自分はどう生きればいいのか？」社会的尺度で生きてきた人は、心の奥底にしまっていた、本来の自分らしさの存在を忘れてしまっている。

周りの評価や立場などとは関係なく、自分らしく生きる生き方とは何か？

心の奥底から引つ張り出すにはあまりにも時間が経過しすぎてしまった。それでも「本来の自分を見つめ直し、自分らしく生きることとは何歳になってからでも可能なのではないだろうか？」私ができるよう

に考えるようになったのは輝けるバブル世代を謳歌したわれわれ世代のビジネスマンが、今まさに生き方の選択に直面している現実を知ってしまったからなのだ。

高度成長期に子ども時代を過ごし、バブル時代に大人になったわれわれ世代は、社会的尺度を重視することによって「自分らしさ」を心の奥底に閉じ込めることで社会に認められてきた。物心ついたころには人口増加が社会問題であり、偏差値で優劣が二分された。常に周囲との競争の中で生きてきたし、大人たちもそれを助長していた。

それは大人になってからも同じだった。優良企業に入社することがステータスであり、それ以外は負け組のレッテルを貼られた。バブルが弾けた1990年代中盤からは様子が変わってくる。「リストラ」という言葉が社会的地位を確立しはじめると、それまでの「優良企業」||「安心」という価値観が怪しくなっていく。それでも、われわれ世代にとってリストラは関係のない雲の上の話。その対象者は勤続30年以上のおじさんたちだったからである。そして今、おじさん世代になったわれわれがリストラの対象になっている。

もしも、あのころに「これはまずい、30年後の自分だ」と危機感を抱いて、自分なりの決断をしていれば、今ごろは「自分らしく」生きているのかもしれない。その決断ができなかった人々が「これからどう生きるのか？」に悩んでいる。

私は大学を卒業後、企業内研修のビジネスに携わり、起業してからは学び業界に25年以上携わってきた。社会人の学び市場は当時、趣味的なものが中心で「英会話」「パソコン」「美容」など自己啓発市場が中心であった。最近の社会人の学び市場は長きにわたる景気の低迷や労働市場の変化によりキャリアアップやキャリアチェンジを目的としたものに変化している。

そして、今日日本は「人生100年時代」と銘打ちリスクリングの必要性を打ち出している。国としては就労年齢を上げることと年金などの社会保障費を削減し、成長分野への労働力の再分配を行う狙いもあるだろうが、私は年齢に関係なく充実した生き方を実現する環境作りにはなるかもしれないと思っている。

この流れのなか、われわれの事業は「生きがい支援カンパニー」として活動範囲を広げている。リストラ対象になっっているわれわれ世代だけではなく、現在働いている人たち、これから社会に出ようとする人たちに充実した生き方をしてほしいと考えている。

日本においてバブル崩壊後約30年にわたり物価の上昇のないデフレ状態が続いていた。しかしコロナ禍(COVID-19)を経て世界的な物価高騰が日本にも大きな影響を与えている。物価高騰による実質賃金の減少が生活を苦しめている。企業努力で多少の賃金上昇はあるにしても生活に余裕がある状態になるのは難しいだろう。そこで個々人の稼ぐ力が必要とされている。年功序列型賃金からジョブ型、成果報酬型へと大手企業を中心に賃金体系が見直される中で自らの収入を上げる努力が求められているのだ。

これからの社会は優良企業に勤めれば安泰という時代ではなくなる。それぞれの価値観で「自分らしく」働くことが大切になる社会がやってくる。そして、コロナ禍を超えて「在宅」「副業」「フリーランス」など働き方にも大きな変化が起きている今こそすべての人に考え方の変革が求められている。

われわれ世代だけではなく、多くの人たちがこの課題に真摯に向き合っていけば、必ずや誰でも自分らしく生きやすい社会が実現できるのではないかと考えている。そしてそのことが「仕事で病む」ことがない社会の実現に近づいていけばよいと考えている。